

## 資 料

# 三重県における 2013 年度環境放射能調査結果

吉村英基, 森 康則, 澤田陽子\*, 前田 明, 志村恭子

## The Report of Environmental Radioactivity in Mie Prefecture (April 2013~March 2014)

Hideki YOSHIMURA, Yasunori MORI, Yoko SAWADA\*,  
Akira MAEDA and Kyoko SHIMURA

原子力規制庁からの委託を受け, 降水中の全ベータ放射能測定, 降下物, 大気浮遊じん, 河川水, 土壌, 蛇口水および各種食品試料のガンマ線核種分析 (I-131, Cs-134, Cs-137, K-40) ならびに空間放射線量率測定を実施し, 三重県における環境放射能の水準の把握を行った。

降水中の全ベータ放射能, モニタリングポストを用いた空間放射線量率の連続測定およびサーベイメータを用いた月 1 回の空間放射線量率の測定結果では, 異常は認められなかった。核種分析においては Cs-137 が降下物試料などから検出されたが, 検出濃度は福島第一原子力発電所事故前と同レベルまで低下していた。

キーワード: 環境放射能, 核種分析, 全ベータ放射能, 空間放射線量率

### はじめに

日本における環境放射能調査は, 1954 年のビキニ環礁での核実験を契機に開始され, 1961 年から再開された米ソ大気圏内核実験, 1979 年スリーマイル島原発事故, 1986 年チェルノブイリ原発事故を経て, 原子力関係施設等からの影響の有無などの正確な評価を可能とするため, 現在では全都道府県で環境放射能水準調査が実施されている<sup>1)</sup>。

2011 年 3 月に発生した東京電力福島第一原子力発電所事故後には, モニタリングポストの増設等が行われモニタリング体制が強化されるとともに, 2013 年度から事業の所管が新たに発足した原子力規制庁となった。

三重県でも日常の放射能レベルを把握するため, 1988 年度から同事業を受託し, 降水中の全ベータ放射能測定, 降下物, 大気浮遊じん, 淡水, 土壌, 蛇口水および各種食品試料のガンマ線核種分析ならびに空間放射線量率測定を実施している。

さらに福島第一原子力発電所事故後は, 国のモニタリング調整会議が策定した「総合モニタリング計画」<sup>2)</sup>に基づき原子力規制庁が実施する調査の一部もあわせて行っている。

本報では, 2013 年度に実施した調査の結果について報告する。

### 方 法

#### 1. 調査の対象

調査対象は, 定時降水 (降雨), 降下物, 大気浮遊じん, 土壌, 淡水 (河川水), 蛇口水, 穀類, 農産物, 牛乳, 海産生物および空間放射線量率である。表 1 に測定項目, 試料の種別, 採取場所等を示す。

#### 2. 採取および測定の方法

試料の採取, 処理および測定は, 「環境放射能水準調査委託実施計画書」(原子力規制庁)<sup>1)</sup>に基づき実施した。

##### 1) 全ベータ放射能測定

試料の採取: 三重県四日市市 (34°59'31", 136°29'06") の当所屋上 (地上 18.6m) に設置した採取装置で, 24 時間の降雨量が 1mm 以上 (毎朝 9:00 時点) のとき雨水を採取し, そこから 200mL (それ以下の場合は全量) を取り試料とした。

前処理: 試料 200mL にヨウ素担体 (1mg/mL) 1mL, 0.05mol/L 硝酸銀 2mL および硝酸(1+1) 数滴

\* 現 三重県鈴鹿保健所

を加え加熱濃縮し、ステンレス製試料皿(50mmφ)で蒸発乾固した。  
測定：採取6時間後にベータ線自動測定装置で測定を行った。比較試料は、酸化ウラン(U<sub>3</sub>O<sub>8</sub>：日

本アイソトープ協会製ベータ線比較線源 50Bq)を用いた。測定時間は測定試料、比較試料、バックグラウンド試料(空試料)すべて40分とした。

表1 放射能調査の試料種別の採取時期・場所

項目	試料の種別	採取月等	採取場所
全ベータ放射能	降水(雨水)	降水ごと(09:00)	三重県四日市市
ガンマ線核種分析	降下物(雨水+ちり)	毎月(1ヶ月間分)	三重県四日市市
	大気浮遊じん	四半期ごと(3ヶ月間分)	三重県四日市市
	淡水(河川水)	2013年10月	三重県亀山市(鈴鹿川)
	土壌(草地)	7月	三重県三重郡菰野町
	蛇口水	6月	三重県四日市市
	蛇口水	四半期ごと(3ヶ月間分)	三重県四日市市
	穀類(精米)	2013年9月	三重県松阪市
	茶(荒茶)	5月	三重県亀山市, 多気郡大台町
	牛乳	8月	三重県度会郡大紀町
	ほうれんそう	11月	三重県四日市市
	だいこん	12月	三重県多気郡明和町
	まだい	4月	三重県北牟婁郡紀北町(熊野灘)
	あさり	4月	三重県伊勢市(伊勢湾沿岸)
	わかめ	2014年2月	三重県鳥羽市(答志島沖)
空間放射線量率	—	連続/毎月1回	三重県四日市市, 三重県伊賀市 三重県伊勢市, 三重県尾鷲市

## 2) 核種分析

降下物：三重県四日市市の当所屋上に設置した大型水盤で、1ヶ月間に降下した雨水およびちりを採取し、濃縮後全量をU-8容器に移し乾固して測定試料とした。

大気浮遊じん：三重県四日市市の当所屋上に設置したハイボリュームエアサンプラを用いて、3ヶ月間で約13,000m<sup>3</sup>(流速54.0m<sup>3</sup>/h, 24h, 10回/3ヶ月)の大気を吸引し、浮遊じんをろ紙(ADVANTEC HE-40T)上に採取した。このろ紙試料を円形に打ち抜き分取してU-8容器に充填したものを測定試料とした。

土壌：三重県三重郡菰野町地内の草地(山砂土)において梅雨明け後、2~3日降雨がない日に深度0~5cm, 5~20cmのものを均一に採取し、これを105℃で乾燥後、ふるい(2mmメッシュ)を通し乾燥細土を得てU-8容器に分取したものを測定試料とした。

淡水：鈴鹿川の河川水を、三重県亀山市関町地内(勸進橋下)で100L採取し、酸固定(HCl(1+1)2mL/L)、濃縮後、全量をU-8容器に移し乾固して測定試料とした。

蛇口水：三重県四日市市の当所1階蛇口水を、100L採取し濃縮後、全量をU-8容器に移し乾固して測定試料とした。

さらに、福島第一原子力発電所の事故を受けたモニタリングの一環として、毎勤務日に蛇口水を1.5L採取し四半期ごとにまとめて濃縮後、全量を

U-8容器に移し乾固して試料としたものの測定も実施した。

食品：精米および牛乳は、それぞれ年1回採取し、約2kgを2Lマリネリ容器に入れ測定試料とした。農産物(茶、野菜)、海産生物(まだい、あさり、わかめ)は、それぞれ年1回収穫時期に採取し、可食部約4~8kgを、蒸発皿で炭化後、電気炉(450℃, 24時間)で灰化し、磨砕後、ふるい(0.35mmメッシュ)を通して異物を除去した上でU-8容器に分取して測定試料とした。

これら測定試料は、Ge半導体検出器で測定時間を70,000秒とし放射性核種の測定を行った。

## 3) 空間放射線量率測定

空間放射線量率の連続測定は県内4地点で実施する体制となっている。北勢局は三重県四日市市内にある当所屋上の地上18.6mの位置に検出器が設置されている。その他3基は県伊賀庁舎(中勢伊賀局：三重県伊賀市)、県伊勢庁舎(南勢志摩局：三重県伊勢市)、県広域防災拠点施設(東紀州局：三重県尾鷲市)に設置しており、すべて地上1mの位置に検出器を置き測定を実施している。4基の測定データ(10分値)はオンラインで国へ報告され、ウェブサイト上で公表されている<sup>3)</sup>。

あわせて、月1回(毎月第2週水曜日10:00)当所前駐車場の地上1mの位置で、シンチレーションサーベイメータによる測定を行った。

測定は時定数を30秒とし30秒間隔で5回指示値を読み、平均値を算出した。

### 3. 採取・測定装置

#### 1) 全ベータ放射能測定

採取装置：ステンレス製降水採取装置（受水面積：1,000cm<sup>2</sup>）

降雨量測定装置：(株)小笠原計器製作所製 C-R543 型雨量計

測定装置：日立アロカメディカル(株)製β線自動測定装置 JDC-3201

#### 2) 核種分析

降下物採取装置：大型水盤(受水面積：5,000 cm<sup>2</sup>)

大気浮遊じん採取装置：柴田科学(株)製ハイボリウムエアサンプラ HV-1000F

核種分析装置：キャンベラ製 Ge 半導体検出器 GC2519-DSA2000, GC2520-DSA1000

#### 3) 空間放射線量率測定

モニタリングポスト：日立アロカメディカル

(株)製環境放射線モニタ装置 MAR-21, MAR-22

シンチレーションサーベイメータ：日立アロカメディカル(株)製 TCS-171

### 結果および考察

#### 1. 全ベータ放射能測定

全ベータ放射能の測定は、低レベルの放射能測定には必ずしも適当とは言えないが、放射性降下物、特に人工核種の放射能レベルの相互比較には著しく妥当性を欠くことなく用いることができることから<sup>1,4)</sup>、年次変化や地域比較に有効な結果が得られる手法である。表2に2013年度に測定を実施した97件の結果を示した。降水中の全ベータ放射能は、97試料中15試料から検出された。検出された試料について核種分析を実施したが、人工放射線核種は検出されず、特に異常と判断される結果はなかった。

表2 定時降水中の全ベータ放射能測定結果

採取期間	降水量(mm)	試料数	検出数	降下量(MBq/km <sup>2</sup> )
2013年 4月	206.0	7	2	8.0
5月	155.0	5	-	N.D.
6月	212.5	9	-	N.D.
7月	112.5	9	1	1.2
8月	79.5	6	-	N.D.
9月	443.5	7	-	N.D.
10月	302.5	10	2	5.3
11月	72.0	7	1	15
12月	64.0	9	1	2.3
2014年 1月	56.5	8	2	6.5
2月	75.5	7	3	18
3月	135.5	13	3	27
2013年度	1,915.0	97	15	N.D.~27
2012年度 <sup>(*)</sup>	2,704.5	99	19	N.D.~49
2011年度 <sup>(**)</sup>	2,591.5	22	6	8.8~24
2010年度	2,258.5	90	20	N.D.~41

注) N.D.: 不検出(計数値が計数誤差の3倍を下回るもの)。

(\*)2012年度はモニタリング強化対応のため5検体欠測。

(\*\*)2011年度は1~3月のみ測定を実施した。

### 2. 核種分析

原子力発電所の事故や核実験等により大気中に放出された放射性物質は、大気圏に拡散した場合は比較的短期間に、成層圏に注入された場合は数年程度までの滞留期間を経て徐々に降下するとされている<sup>1)</sup>。これらによる外部被ばくとともに、呼吸や食物の摂取を通じて放射性核種が体内に取り込まれることによって長期に渡る被ばく(内部被ばく)が発生する<sup>5)</sup>。試料はこれを考慮し、体内への摂取量の指標として食品、大気浮遊じんを、環境への流入量の指標として降下物、大気浮遊じん、淡水(河川水)、土壌を、環境での蓄積状況の指標として土壌、食品を選択した。

通常時から定量対象としている3核種は、大気

圏拡散の指標として短半減期の核種<sup>6)</sup>のうちI-131(半減期 8.02d)、大気圏拡散、成層圏拡散ともに影響の大きい比較的長半減期の核種<sup>6)</sup>の指標としてCs-137(半減期 30.04y)、比較の指標として天然放射性核種のうちK-40(半減期 1.277×10<sup>9</sup>y)<sup>7)</sup>である。さらに2011年度から福島第一原子力発電所の事故を踏まえて、Cs-134(半減期 2.06y)<sup>6)</sup>も対象としている。なお、蛇口水、精米、牛乳を除く食品試料は灰化して測定を行うため、I-131は対象としていない。

#### 1) 環境試料

表3に2013年度における三重県内の降下物、大気浮遊じん、淡水、土壌のガンマ線核種分析結果を示す。

降下物及び土壌表層(0-5cm)から Cs-137 が検出された。K-40 は降下物の一部、大気浮遊じん、淡水、土壌から検出された。Cs-137 以外の人工放射

性核種は検出されなかった。

降下物、土壌とも検出濃度は事故前に Cs-137 が検出されていたレベルと同程度であった。

表3 環境試料中の I-131, Cs-134, Cs-137 および K-40 濃度

試料	採取時期	試料数	単位	I-131	Cs-134 <sup>(*)</sup>	Cs-137	K-40		
降下物	2013年	4月	1	MBq/km <sup>2</sup>	N.D.	N.D.	0.057	1.71	
		5月	1	MBq/km <sup>2</sup>	N.D.	N.D.	N.D.	1.03	
		6月	1	MBq/km <sup>2</sup>	N.D.	N.D.	N.D.	N.D.	
		7月	1	MBq/km <sup>2</sup>	N.D.	N.D.	N.D.	N.D.	
		8月	1	MBq/km <sup>2</sup>	N.D.	N.D.	N.D.	N.D.	
		9月	1	MBq/km <sup>2</sup>	N.D.	N.D.	N.D.	0.78	
		10月	1	MBq/km <sup>2</sup>	N.D.	N.D.	N.D.	0.75	
		11月	1	MBq/km <sup>2</sup>	N.D.	N.D.	N.D.	N.D.	
		12月	1	MBq/km <sup>2</sup>	N.D.	N.D.	N.D.	0.67	
		2014年	1月	1	MBq/km <sup>2</sup>	N.D.	N.D.	N.D.	N.D.
			2月	1	MBq/km <sup>2</sup>	N.D.	N.D.	N.D.	N.D.
			3月	1	MBq/km <sup>2</sup>	N.D.	N.D.	N.D.	0.91
		2013年度	12	MBq/km <sup>2</sup>	N.D.	N.D.	N.D.~0.057	N.D.~1.71	
	2012年度	12	MBq/km <sup>2</sup>	N.D.	N.D.~0.064	N.D.~0.126	N.D.~1.96		
	2011年度	12	MBq/km <sup>2</sup>	N.D.~13.3	N.D.~18.4	N.D.~17.7	N.D.~1.85		
	1989~2010年度	264	MBq/km <sup>2</sup>	N.D.~1.24	-	N.D.~0.348	N.D.~57.9		
大気浮遊 じん	2013年	4~6月	1	mBq/m <sup>3</sup>	N.D.	N.D.	N.D.	0.274	
		7~9月	1	mBq/m <sup>3</sup>	N.D.	N.D.	N.D.	0.269	
		10~12月	1	mBq/m <sup>3</sup>	N.D.	N.D.	N.D.	0.310	
	2014年	1~3月	1	mBq/m <sup>3</sup>	N.D.	N.D.	N.D.	0.240	
		2013年度	4	mBq/m <sup>3</sup>	N.D.	N.D.	N.D.	0.240~0.310	
		2012年度	4	mBq/m <sup>3</sup>	N.D.	N.D.	N.D.	0.249~0.264	
		2011年度	4	mBq/m <sup>3</sup>	N.D.	N.D.~0.296	N.D.~0.317	0.239~0.317	
		1989~2010年度	88	mBq/m <sup>3</sup>	N.D.	-	N.D.	N.D.~0.565	
淡水 (河川水)	2013年	10月	1	mBq/L	N.D.	N.D.	N.D.	81.3	
	2012年度	1	mBq/L	N.D.	N.D.	N.D.	66.1		
	2011年度	1	mBq/L	N.D.	N.D.	N.D.	67.3		
	2003~2010年度	8	mBq/L	N.D.	-	N.D.	58.1~78.9		
土壌 (0-5cm)	2013年	7月	1	Bq/kg 乾	N.D.	N.D.	1.35	706	
	2012年度	1	Bq/kg 乾	N.D.	N.D.	1.03	744		
	2011年度	1	Bq/kg 乾	N.D.	N.D.	1.19	775		
	1989~2010年度	22	Bq/kg 乾	N.D.	-	N.D.~2.69	556~812		
土壌 (5-20cm)	2013年	7月	1	Bq/kg 乾	N.D.	N.D.	N.D.	721	
	2012年度	1	Bq/kg 乾	N.D.	N.D.	N.D.	733		
	2011年度	1	Bq/kg 乾	N.D.	N.D.	N.D.	750		
	1989~2010年度	22	Bq/kg 乾	N.D.	-	N.D.~1.63	593~856		

注) N.D.: 不検出 (計数値が計数誤差の3倍を下回るもの)。  
過去のデータの採取場所は、表1と異なるものがある。  
(\*)Cs-134 は2010年度以前には測定対象としていない。

## 2) 食品試料

表4に2013年度における県内の蛇口水、県内で生産された精米、農産物(荒茶、ほうれんそう、だいこん)、牛乳、県近海でとれた海産生物(まだい、あさり、わかめ)のガンマ線核種分析結果を示す。

茶およびまだいから Cs-137 が検出されたが、検出値は事故以前の結果<sup>8)</sup>と比較して特に高いものではなく平常の範囲であると考えられた。

2013年度の食品試料における検出値は、2013年4月に施行された食品の規格基準(飲料水10Bq/kg、乳児用食品・牛乳50Bq/kg、一般食品100Bq/kg)<sup>9)</sup>と比較して大きく下回る値であった。

K-40はすべての試料から検出されたが、表4に示した過去の結果および他県の結果<sup>8)</sup>との比較から、平常値の範囲と判断された。

食品試料においてもCs-137以外の人工放射性核種は検出されなかった。

表4 食品試料中のCs-134, Cs-137 およびK-40 濃度

試料	採取時期	試料数	単位	Cs-134 <sup>(*)</sup>	Cs-137	K-40
蛇口水	2013年 6月	1	mBq/L	N.D.	N.D.	23.1
	2012年度	1	mBq/L	N.D.	N.D.	16.9
	2011年度	1	mBq/L	0.408	0.434	24.5
	1989～2010年度	36	mBq/L	-	N.D.～0.313	17.6～69.9
蛇口水	2013年 4～6月	1	mBq/L	N.D.	N.D.	16.4
	7～9月	1	mBq/L	N.D.	N.D.	19.8
	10～12月	1	mBq/L	N.D.	N.D.	25.5
	2014年 1～3月	1	mBq/L	N.D.	N.D.	19.6
	2013年度	4	mBq/L	N.D.	N.D.	16.4～25.5
	2012年度	4	mBq/L	N.D.	N.D.	17.2～20.4
	2011年度	1 <sup>(**)</sup>	mBq/L	N.D.	N.D.	21.3
穀類(精米)	2013年 10月	1	Bq/kg 生	N.D.	N.D.	27.0
	2012年度	1	Bq/kg 生	N.D.	N.D.	27.4
	2011年度	1	Bq/kg 生	N.D.	N.D.	23.0
	1989～2010年度	22	Bq/kg 生	-	N.D.	21.9～34.2
茶(荒茶)	2013年 5月	2	Bq/kg 乾	N.D.	0.184～0.236	560～578
	2012年度	2	Bq/kg 乾	0.370～0.436	0.517～0.643	551～579
	2011年度	2	Bq/kg 乾	3.83～4.42	3.87～4.71	623～633
	1989～2011年度	42	Bq/kg 乾	-	N.D.～1.72	417～766
牛乳	2013年 8月	1	Bq/L	N.D.	N.D.	49.0
	2012年度	1	Bq/L	N.D.	N.D.	48.8
	2011年度	1	Bq/L	N.D.	N.D.	49.0
	1989～2010年度	36	Bq/L	-	N.D.	32.0～51.8
ほうれんそう	2013年 11月	1	Bq/kg 生	N.D.	N.D.	175
	2012年度	1	Bq/kg 生	N.D.	N.D.	141
	2011年度	1	Bq/kg 生	N.D.	N.D.	146
	1989～2010年度	22	Bq/kg 生	-	N.D.～0.058	58.0～237
だいこん	2013年 12月	1	Bq/kg 生	N.D.	N.D.	84.1
	2012年度	1	Bq/kg 生	N.D.	N.D.	95.7
	2011年度	1	Bq/kg 生	N.D.	N.D.	77.6
	1989～2010年度	22	Bq/kg 生	-	N.D.～0.056	63.0～106
まだい	2013年 4月	1	Bq/kg 生	N.D.	0.158	157
	2012年度	1	Bq/kg 生	N.D.	0.165	172
	2011年度	1	Bq/kg 生	N.D.	0.130	147
	1994～2010年度	17	Bq/kg 生	-	0.090～0.244	92.5～164
あさり	2013年 4月	1	Bq/kg 生	N.D.	N.D.	74.7
	2012年度	1	Bq/kg 生	N.D.	N.D.	72.3
	2011年度	1	Bq/kg 生	N.D.	N.D.	73.0
	2001～2010年度	10	Bq/kg 生	-	N.D.	31.9～83.2
わかめ	2014年 2月	1	Bq/kg 生	N.D.	N.D.	219
	2012年度	1	Bq/kg 生	N.D.	N.D.	231
	2011年度	1	Bq/kg 生	N.D.	N.D.	236
	1998～2010年度	13	Bq/kg 生	-	N.D.	105～278

注) N.D.: 不検出(計測値が測定誤差の3倍を下回るもの).

過去のデータの採取場所は、表1と異なるものがある.

(\*)Cs-134は2010年度以前には測定対象としていない.

(\*\*)四半期ごとの蛇口水の測定は2011年度第4四半期から開始している.

### 3. 空間放射線量率測定

表5および6に2013年度の三重県内におけるモニタリングポストおよびサーベイメータによる空間放射線量率の測定結果を示す. モニタリングポストの測定値は、従前から報告してきた1時間値の平均値, 最大値, 最小値を示している.

各局の最大値は降雨時に観測され、天候による上昇によるものと判断された.

ここ数年、北勢局モニタリングポストでの測定結果は、降雨時を除くとほぼ45～50nGy/hの範囲で推移しており、過去3年間の結果と比較しても、2013年の測定結果は平年どおりといえる.

他の3基については、2012年度の結果および他都道府県の観測値<sup>3)</sup>と比較して異常な値は観測されていないこと、過去の県内のサーバイメータによる空間放射線量率調査結果<sup>10)</sup>から、2013年度の観測値は平常の範囲内にあるとしてよいと考えられた。東紀州局が他の局と比較し高い値となるのは、この地域が花崗岩質の地質であるためと推定される<sup>10)</sup>。また、東紀州局では2013年9月

にモニタリングポスト近傍の建屋を撤去する工事が実施された。この影響で空間放射線量率のレベルが変化し、撤去工事前の2013年4月～8月の平均値が92nGy/hであったのに対して工事後の2013年10月～2014年3月の平均値は83nGy/hと低下した。これは建屋がなくなったことよって、空気の交換が良くなり、空気中に存在する放射性核種の滞留濃度が低下したためと考えている。

表5 2013年度の空間放射線量率1（宇宙線による線量率(約30 nGy/h)を含まない)

測定年月	北勢局モニタリングポスト(nGy/h)				サーバイメータ(nGy/h) (地上1m)						
	測定回数	平均値	最大値	最小値	測定回数	測定値	平均値	最大値	最小値		
2013年	4月	720	47	61	45	1	68	-	-	-	
	5月	744	46	61	45	1	67	-	-	-	
	6月	720	47	61	45	1	66	-	-	-	
	7月	744	47	67	45	1	67	-	-	-	
	8月	744	47	63	45	1	69	-	-	-	
	9月	720	46	57	44	1	69	-	-	-	
	10月	744	46	52	44	1	70	-	-	-	
	11月	720	46	59	44	1	68	-	-	-	
	12月	744	46	57	44	1	66	-	-	-	
	2014年	1月	744	46	62	43	1	72	-	-	-
		2月	670 <sup>(*)</sup>	46	58	44	1	63	-	-	-
		3月	744	47	62	43	1	75	-	-	-
2013年度	8,758	46	67	43	12	-	68	75	63		
2012年度	8,751	46	72	43	12	-	71	82	66		
2011年度 <sup>(**)</sup>	8,782	47	81	43	199	-	68	90	60		
2010年度	8,757	47	75	41	-	-	-	-	-		

(\*) 機器点検等のため欠測がある。

(\*\*) 地上1mにおけるサーバイメータによる測定は2011年6月から開始した。

測定頻度は2011年6月から12月までは毎日、2012年1月以降は現在と同じ月1回である。

表6 2013年度の空間放射線量率2（宇宙線による線量率(約30 nGy/h)を含まない)

測定年月	中勢伊賀局(nGy/h)			南勢志摩局(nGy/h)			東紀州局(nGy/h)				
	平均値	最大値	最小値	平均値	最大値	最小値	平均値	最大値	最小値		
2013年	4月	66	86	64	52	73	49	92	110	90	
	5月	65	86	64	52	75	49	92	118	90	
	6月	66	82	63	52	80	50	92	114	90	
	7月	65	87	63	52	69	50	93	105	90	
	8月	66	78	64	53	74	50	92	121	90	
	9月	65	73	61	52	63	44	85	112	78	
	10月	65	72	63	52	73	50	83	94	79	
	11月	66	99	63	52	67	50	82	96	81	
	12月	66	80	64	52	68	50	83	123	81	
	2014年	1月	66	86	63	52	76	50	83	107	81
		2月	66	80	55	52	76	43	83	99	81
		3月	66	84	63	52	72	50	83	110	81
2013年度	66	99	55	52	80	43	87	123	78		
2012年度	65	108	59	53	84	48	92	125	89		

空間放射線量率を測定することで、公衆の線量当量を外部被ばく推定式(1)<sup>4,11)</sup>により推定することができる。それぞれの地点の2013年度の年平均値（東紀州局は建屋撤去後の平均値）を式(1)により換算すると、北勢局 46nSv/h、中勢伊賀局 65nSv/h、南勢志摩局 53nSv/h、東紀州局 83nSv/h

となり、すべての局で公衆の年線量当量限度（1mSv/年）<sup>4)</sup>の時間換算量（114nSv/h）を下回っており問題のない結果であると言える。

$$\text{Hex(Sv)} = \text{Dex(Gy)} \times 1.0 \dots (1)$$

Hex(Sv)：時間当たりの(実効)線量当量  
Dex(Gy)：時間当たりの(空気)吸収線量  
2013年度も福島第一原子力発電所事故を  
考慮し換算係数は緊急時の1.0を用いた。

地上1mでのサーベイメータによる測定についても、異常値は観測されておらず、機器の精度、回数および測定条件等から、結果が変動しやすく、モニタリングポストの測定値より高い値を示す傾向があることを考慮すると、平常値の範囲と判断された。

異常時に的確に対応するためには、さらに観測を継続して平常時における各地域の空間放射線量率の変動幅などについて把握しておく必要があると思われる。

### まとめ

1. 2013年度の三重県定点における降水中の全ベータ放射能測定からは、特に異常なデータは得られなかった。
2. 2013年度の環境試料(降下物, 大気浮遊じん, 陸水, 土壌)および食品試料(蛇口水, 農産物, 水産物)中のガンマ線放出核種の測定結果では、人工放射性核種であるCs-137が一部試料から検出された。前年度まで検出されていたCs-134の検出はなく、Cs-137の検出濃度も福島第一原子力発電所事故以前とほぼ同程度まで低下していたが、今後も調査を継続し推移を把握していく必要がある。
3. 2013年度の三重県定点におけるモニタリングポストによる連続測定, サーベイメータを用いた月1回の測定では、空間放射線量率の異常値は観測されなかった。

本報告は、原子力規制庁からの受託事業として、三重県が実施した「環境放射能水準調査」の成果である。

### 文 献

- 1) 原子力規制庁監視情報課放射線環境対策室：環境放射能水準調査委託実施計画書(2013).
- 2) モニタリング調整会議：「総合モニタリング計画」(2013)。
- 3) 原子力規制庁ウェブサイト「放射線モニタリング情報」<http://radioactivity.nsr.go.jp/ja/>。
- 4) 原子力安全委員会：環境放射線モニタリング指針(2008).
- 5) 放射線医学総合研究所：特別研究「環境における放射性物質の動態と被ばく線量算定に関する調査研究」最終報告書(1999).
- 6) (社)日本アイソトープ協会：アイソトープ手帳11版, 丸善(2011).
- 7) Measurement of Radionuclides in Food and the Environment / A Guidebook, IAEA, VIENNA (1989).
- 8) (財)日本分析センター：平成5年度～平成22年度環境放射能水準調査結果総括資料.
- 9) 2012年3月15日付け食安発0315第1号厚生労働省医薬食品局食品安全部長通知：「乳及び乳製品の成分規格等に関する省令の一部を改正する省令, 乳及び乳製品の成分規格等に関する省令別表の二の(一)の(1)の規定に基づき厚生労働大臣が定める放射性物質を定める件及び食品, 添加物等の規格基準の一部を改正する件について」。
- 10) 尾辺俊之, 富森聡子, 橋爪 清：三重県内の空間放射線量率について, 三重県衛生研究所年報No.39, 93-98 (1993).
- 11) 吉岡満夫：公衆の被ばく線量評価, 中島敏行編 緊急時における線量評価と安全への対応, 放射線医学総合研究所, 17-40 (1994).